

## 短期英国学術研修における自由旅行訪問先選定の支援

鈴木, 右文  
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/7410595>

---

出版情報：英語英文学論叢．76，pp. 53-68，2026-03-18．九州大学大学院言語文化研究院英語科  
バージョン：  
権利関係：



# 短期英国学術研修における 自由旅行訪問先選定の支援

鈴木 右 文

## 1. はじめに

昨今日本の大学で教育の国際化への努力が行われてきており、その評価項目に海外留学への派遣人数がある以上、費用の絶対額が比較的安く卒業が遅れることもない短期研修に各大学が力を入れるのは自然なことである。これをよく表しているのが政府の「教育未来創造会議」が2023年4月27日「未来を創造する若者の留学促進イニシアティブ（第二次提言）」(p.15)で明記した高等教育段階での中短期留学者数の数値目標であり、2018年度の実績11.3万人に対して2033年度までに年間23万人を目標とし、相当な増強が必要な情勢となった。これに対し、日本学生支援機構による「2023年度日本人学生留学状況調査結果」(p.2)によれば、中短期派遣留学者数のうち、3か月から1年未満の中期留学が24%(20,796名)、3か月未満の短期留学が76%(65,791名)となっており、明らかに短期留学が数値を伸ばす鍵になっている。

しかし、各大学では短期留学プログラムを開設して留学者を増やす努力はしても、担当者の人的資源や留学支援の財政支援の原資には限りがあるため、数値を伸ばすことを優先して、その分大学としての企画内容や参加学生のケアについての関与は必要最小限とし、それ以上については業者や現地受入先に依頼するという場合が多いようである。

これに対し、九州大学大学院言語文化研究院で開催してきている短期海外研修の「ケンブリッジ大学英語・学術研修」(鈴木(2013)、鈴木・廣田(2025)で紹介：以下「本研修」と表記)では、合否確定から現地出発まで10か月程度の期間があることと、筆者がかなりのエフォートを本研修に割いていることから、これまで1セメスターを超える長期間の事前研修を行い、車椅子参加者への対応方法(詳細は鈴木(2020))、海外からの留學生が参加する場合の旅券・査証の取得や紛失時の対応と日本と英国での出入国に関する事項(詳細は鈴木(2019))、感染対応(詳

細は鈴木（2024）等の研究を個人的に行ってきた。このようなタイプの短期研修は送り出し側の運営に労力がかかるので少数派であろうと思われるが、実行に必要と思われる対応の探索には希少価値があると考えており、本稿もそうした試みのひとつである。

本稿では、最近本研修で注力している自由旅行対応の事前支援のひとつについてまとめたい。長い事前研修の間に、グループの形成や旅程作りから始めて交通や宿泊の手配、安全確保に関する指導を行い、現地での週末を中心とした自由日に参加学生がグループごとに自力で英国を旅することができる体制を整えた。さらに自由旅行の質を高めるため、旅行の目的地の選定についての参考書（鈴木（2026予定））を上梓することとなり、その書籍自体には書けなかった、内容や構成の狙いについて本稿を書き残すこととした<sup>1</sup>。

なお、本稿と鈴木（2026予定）は、言語文化研究院教授会によりお認めいただいた2025年4月から9月までのサバティカルがなければ内容的に執筆できなかった。このサバティカルにより、4月17日から6月10日までの取材旅行と、8月23日から9月13日までの研修引率兼取材旅行を行うことができた。教授会構成員に心より感謝申し上げる。

## 2. 訪問先選定の実態

はるかな過去の経験から言えることであるが、本研修の参加学生は、何も指導せずに放置すれば、特に現地での旅行の準備を事前に行うことはせず、現地で行き当たりばったりで近隣の観光地へ日帰りで出かけようとする。そこで旅の準備方法を指導して<sup>2</sup>、早くから準備を開始するよ

---

1 書籍自体に狙いを記載できない理由は、一般書を兼ねた著作としての方針と、価格を抑制するために頁数を縮減する必要がある。

2 詳細は省略するが、ガイドブックにあるようなレールパスや宿泊等に関することはもちろん、列車時刻の検索方法と日本からの列車座席のオンライン予約の方法、現地での列車の遅延やストライキの実態や予測・対応方法、乗車の合図をしないと通過されることがあること等現地のバスの実態と注意点、列車の乗車券の手配方法、治安の実態、遺失物の扱い、携帯体制の準備等々、実に様々な指導を行っている。安全は最優先で、集団研修であるため、個人の問題は集団の問題に波及する可能性が高く、完全な個人旅行の場合に比べ、より強固な安全の確保が求められる。そのため、屋間のケンブリッジ市内を除いて、単独行動を許していない。市外への外出は必ず複数でという制約を課している。

うに仕向けているのだが、これにより混雑期に予約の必要な宿泊（概ね1年前から予約可能）、観劇（1年～半年前から予約可能）、寝台列車（1年前から予約可能）等の確保を優位に進めることができるようになり、加えて自分たちの訪問することになる場所についてのプレゼンを事前研修で行って学び合いをすることができるようにもなった。こうして交通機関や芸術分野等の日英差について知ることとなり、短期研修での重要な目的のひとつである異文化体験は、このような準備からも始まっていると言える。

だがしかし、本研修の参加学生の選択する旅行先の選定については、最近まで系統だった指導はしてこなかった。そのため、ケンブリッジから近いロンドン市内を中心に、ガイドブックにあるような近隣の有名観光地を行先を選び、どうしても日本からのパッケージツアーの一部のような行程になりがちであった。これには弊害がある。例えば、大英博物館の展示品等の内容の研究を行わずに滞在時間1時間等という無謀な計画を立てる、ロンドンでマーケットだけを巡ることとする、ハリー・ポッターのロケ地巡りに専心する、サッカーのプレミア・リーグの複数の試合とサッカー系の博物館だけの旅程とする等の計画が過去には見られた。こうした計画は個人旅行ならよくても、集団で学びあいながら行う研修の枠組みで行う旅行であれば、もっと研修全体の学術的な目的に沿った計画とするべきである。

そこでまずは、寝台列車を利用すると旅行に使える時間が半日程度多く取れることを説いて<sup>3</sup>、長年かなりの割合の参加学生をエジンバラ、グラスゴー、湖水地方方面に向かわせて遠方へいざなうことには成功してきたが、ひとつひとつの訪問先の選定については関与して来なかった。そもそもこの自由旅行は本研修の参加学生自身の費用負担と責任のもとで実施されることとなっており、一定の条件のもとでどこを訪れるのかについては参加学生にとってある程度自由であるべきではあるが、できるかぎり良質な異文化体験になるように、ショッピングに明け暮れると

---

3 レールパス利用の場合の寝台の追加料金だけでホテル代以上にかかるのだが、多くの参加学生は寝台利用によって時間を買うことを選んでいる。日本で寝台列車がほとんどなくなっているがゆえの物珍しさも手伝っているであろう。個室で安全性も高く、揺れも少なく、ほとんどの参加学生は快適に眠ることができると評している。

いったことではなく、学術的な意味のあるもの、歴史・文化の学びになるものをしかもバランスよく選定して欲しいものである。

### 3. 訪問先選定の理想像

自由旅行が平日を中心とした本体の現地研修メニューに支障をもたらすことは許されず、日数や門限等に制約があるので、研修の枠内での実施とは言っても、あくまで補助的なものにならざるを得ない。従ってポイントとなるのは、いかに少ない時間で多くの意義深い体験をバランスよく得るかということである。本研修で自由旅行に使える日数は、最低で4日（3日連続<sup>4</sup>＋日帰り1回）、多くても5日（3日連続＋日帰り2回）となっているが（寝台列車利用で見た目よりも使える時間はある<sup>5</sup>）、現実にはこれだけの日数であれもこれもと理想的な旅程にするのは大変困難なことである。従って大切なことは、大学生の学業としての短期研修なので、英国の地誌、歴史その他の知識を身につけることから始めることとし、英国全体の地理的歴史的概略を学び、その中から各自にとって訪問可能でバランスのよい訪問地を、現実的制約からして少数になるであろうが、きちんと選択していくことである。これまではこの点についての指導や資料の提示等が欠けていた。

その反省から生まれるのが鈴木（2026予定）である。この書籍では、のべ1000近く（カテゴリー別に重複しているものもあるので実数は少な

---

4 これは遠方への旅行を促すため、過去に金曜日1回を休みとして3連休になるようにした結果である。寝台列車は木曜日の夜に利用することになる。

5 本研修で利用している寝台列車はScotRailのCaledonian Sleeperであり、ロンドン・ユーストン23:45発に限定している。21:15発の利用も認めればInverness, Fort William, Aberdeenに直接到着できるので旅の幅を広げることができるのだが、ケンブリッジの出発時刻が早くなり、夕方の授業や荷造りのことを考えると研修本体への影響が危ぶまれるため、許可していない。なお、この列車にはレールパスだけで乗車できる座席車もあるが、安全上許可していない。さらに土曜日出発分が運休になることを伝えておく。中には昼間の移動時間の節約を図って土曜夜の便でロンドンに到着く計画を立てる参加学生がいるからである（健康上往復の夜行列車利用ははそもそも好ましくないし、寝台料金は個室なので相当に高い）。また英国にもう1本あるCornwall方面への寝台列車であるNight Rivieraについては、レールパスが利用できないことに注意することを参加学生に伝えている（Caledonian Sleeperはberth supplementを購入すればレールパスで寝台利用が可能）。

くなる)の訪問地をカテゴリー別に紹介しているが、市販のガイドブックと異なり、地域別ではなく、世界遺産、遺跡、教会、博物館、美術館、庭園、自然景観、保存鉄道のようなカテゴリー別に分類しており、本拠地(本研修ではケンブリッジ)からの地理的近接性によってまず絞り込みを図ってその範囲しか調べないのではなく、カテゴリー別に訪問地候補になるものを見渡し研究した上で、旅の目的、自分の関心に沿う目的地という観点から絞り込みを始めるべきである。そうした方が英国全体の目的地を研究することができ、なおかつ自分が何を見学したいのかをしっかりと見定めた上で旅程を組み立てていくことができるからである。たとえば悪いが、遊園地の場合に、入口付近だけに絞り込むわけにはいかず、園全体に目配りをしてから体験するアトラクションと巡り順を決めておくのと同じことである。

#### 4. こだわりの地

ここまでで述べてきたことと矛盾するようにも聞こえるが、自由旅行で最も優先すべきは、自分自身のこだわりの地があるならそれである。しかし、それだけにすべての時間を使うのではなく、あくまでいくつか選定する目的地の筆頭候補とするという意味である<sup>6</sup>。旅行を楽しみに思う気持ちは、自分がどうしても行きたいと思っていた地が含まれていれば強くなり、準備に身が入ることにもつながる。学術的なものであってもなくても可能なら訪問するべきであろう。

過去の例を振り返ると、そうしたこだわりの地には、実際に訪問できたかどうかは別にして、以下のようなものがあった<sup>7</sup>。

- ・宇宙物理学専攻者：Old Royal Observatory (Greenwich)
- ・看護学科生：Florence Nightingale Museum
- ・建築学科生：Forth Bridge (World Heritage Site)

---

6 注2にあるとおり、本研修では自由旅行での単独行動を許していないため、自分だけのこだわりの地の場合、ひとりで訪問するわけにはいかないのだが、他の参加学生を誘って互いのこだわりの地へ行くようにする解決方法がある。どうしてもうまくいかない場合は、集団研修の安全確保の観点から、諦めざるを得ない場合も考えられる。

7 訪問先の正式名称に定冠詞(The)が付く場合もあるが、鈴木(2026予定)では付さない形で統一しているため、本稿でも原則としてそれに倣っている。

- ・教育学に興味の強い者：New Lanark (World Heritage Site)
- ・歴史ファン：Salisbury Cathedral (Magna Carta)
- ・オーケストラ所属者：BBC Promenade Concert (Royal Albert Hall)
- ・バンド・メンバー：Liverpool (Beatles Story; Beatles Museum)
- ・ブラスバンド所属者：Military Tattoo (Edinburgh Castle)
- ・テニス・サークル所属者：Wimbledon Lawn Tennis Museum
- ・サッカーファン：National Football Museum (Manchester)
- ・ラグビー部所属者：World Rugby Museum; Rugby School
- ・馬術部所属者：National Horseracing Museum (ニューマーケット)
- ・シェークスピアを卒論テーマとする者：Stratford-upon-Avon
- ・シャーロック・ホームズのファン：Sherlock Holmes Museum
- ・ボーイ・スカウト出身者：Brownsea Island<sup>8</sup>
- ・鉱石マニア：Museum of Natural History (ロンドン)
- ・自然愛好者：Seven Sisters; Beachy Head
- ・鉄道ファン：Mt Snowdon (Snowdon Mountain Railway)
- ・ウィスキー愛好者：Glenfiddich Distillery

## 5. 世界遺産

英国にある様々な訪問先の中でも、世界遺産というカテゴリーは学術的にも重要なものばかりであるので、いずれも訪問に値する。その中でも、産業革命を遂げ、一時は世界の工場と言われた英国だけに、産業関係の世界遺産が多く、次のどれかを旅程に組み込むことが推奨される。

- ・Cornwall and West Devon Mining Landscape：いくつかの地区に分かれ、錫鉱山跡が多く見学できる。
- ・Ironbridge Gorge：製鉄業の地で、古炉の博物館、世界最古の鉄橋、

---

8 本研修では鉄道や道路で渡れない島嶼部への旅行は認めていないが、従来から定期船で15分ほどの The Isle of Wight は例外としてきた。Brownsea Island もそれよりも所要時間の短い渡船で本土から渡ることができるため、問合せがあったときに許可することとした。なお本稿では英国と言ってもマン島、チャンネル諸島、オークニー諸島、シェトランド諸島、アイラ島、アラン島、アウター・ヘブリディーズ、セント・キルダ島、海外領土等は含まれておらず、北アイルランドも含まれていない。それに対し鈴木（2026予定）の場合は、北アイルランドは含まれないが、その他はある程度含まれている。

ヴィクトリア朝の暮らしと産業がテーマの野外博物館等がある。

- Blaenavon Industrial Landscape：石炭鉱山跡の国立博物館で地下の坑道見学ができ、近くに製鉄所跡もある。
- The Slate Landscape of Northwest Wales：スレートの採石場と博物館が見学できる。
- Derwent Valley Mills：ダーウェント川沿いの水力紡績工場（Silk Mill、アークライトによる Masson Mill、Cromford Mills 等）で構成される。
- New Lanark：クライド川沿いにある水力紡績工場。ロバート・オーウェンによる理想工場。

次に、鈴木（2026予定）では英国における全ての世界遺産を網羅しているが、訪問する学生が少なく見逃しがちなものをいくつか挙げておく。

- Palace of Westminster：Big Ben は見ても議会见学する参加学生は稀。行くと意外に狭いことや sword line や火薬の検査室が興味深い。
- Canterbury Cathedral：国教会総本山だが訪問する参加学生は稀。ベケット暗殺の歴史やゴシック様式に注目して欲しいところ。
- Stonehenge：歴史上有名だが訪問する参加学生は稀。
- City of Bath：ローマ時代から続く歴史と浴場文化に注目。
- Jodrell Bank Observatory：現役の電波望遠鏡と学習施設が充実。

## 6. 博物館・美術館類

博物館には様々な種類があるが、鈴木（2026予定）では博物館を「学術系」「図書館」「スポーツ系」「郷土・歴史系」「文化系」「軍事系」「産業系」「交通系」「宗教系」「その他」に分類しており、美術館は下位分類なしで取り上げている。理想としてはそれぞれのカテゴリーから選出できるとよいのだが、実際にはひとつくらいしか組み込むことができないであろうから、博物館は British Museum、美術館は National Gallery に落ち着く参加学生が多いのは自然かもしれない。しかし、ロンドンは再訪する機会があると考えて、ロンドン内の別の博物館・美術館もしくは地方の博物館・美術館を選ぶのもよく、また本体の短期研修の目的に沿ったものとするのも意義深い。以下、上記それぞれの分類について、少しずつ推奨しておくこととする。

### <学術系>

大学系博物館と大都市基幹博物館が多くある。大学系ではオックスフォード大学の Ashmolean Museum、ケンブリッジ大学の Fitzwilliam Museum、グラスゴー大学の Hunterian Museum あたりが日本の大学にない規模として代表的である。

### <図書館>

主要なところでは British Library (日本の国立国会図書館に相当し展示も充実) と Bodleian Library (オックスフォード大学) が見学可能。

### <スポーツ系>

英国で盛んな競技の博物館や聖地としての競技場の見学が主流。例えば Wembley Stadium はサッカーのナショナルチーム用のスタジアムで、試合のない日を中心にして見学ツアーがある。

### <郷土・歴史系>

各地方に郷土博物館があり、それぞれ歴史や地方の特徴を学べるが、中でも立派なのがグラスゴーの Kelvingrove Art Gallery and Museum。遠方ではウェールズ国立で古民家類を広大な敷地で展示している St Fagans National History Museum が大規模 (national はウェールズのこと)。

### <文化系>

作家系や音楽系が多いが、学びとして貴重なのは三角貿易を担ったリヴァプールで奴隷売買への反省を込めた International Slavery Museum。変わったところでは Shetland 主島 Lerwick にある Up-Helly-Aa Exhibition で、世界的に有名な火祭りに関し、昼間労働者が夜間に開館していて印象的 (訪問は現実的に難しい)。

### <軍事系>

英国全体を扱うものと、地方からの貢献をうたう郷土系がある。前者で 1 か所ならロンドンの Imperial War Museum が概括的で、戦勝国の展示内容の特徴を知る機会。地方都市のものはほとんどが後者になる。

### <産業系>

工場の類が世界遺産の範疇にかなりあるが、総合的なものとなると Science and Industry Museum (マンチェスター) が大規模で見応えあり。

### <交通系>

ロンドンであれば London Transport Museum、規模からするとヨークにある National Railway Museum が展示が充実していて学びが深い (新幹線

0系を展示)。また地方には Crich Tramway Village のようなトラム系、Portsmouth Historic Dockyard のようなドックヤード系等、専門的な野外系のところも多い。

#### <宗教系>

博物館と銘打つところは多くないが、多くの教会類で宗派の特徴や歴史等の学びが得られる。

#### <その他>

省略

#### <美術館>

ロンドンでは National Gallery がとりわけ有名だが、絵画の美術館なので、総合的な美術館としては Victoria & Albert Museum がよいが、あまり参加学生には認知されていない。地方で注目の総合的美術館は、グラスゴー郊外の Barrell Collection が展示空間を含めて味わい深い。

### 7. 建築物：城郭・宮殿・大聖堂・教会・学校・歴史的建築

英国は他の欧州諸国のように、壮麗な歴史的建造物で有名である。街で見かける建築物がノルマン（ロマネスク）、ゴシック、ルネサンス、バロック、ジャコビアン、ジョージアン、ヴィクトリアン等のどの様式のものか識別できるくらいの予習をした上で訪問して欲しい。

#### <城郭>

1か所だけとなれば Edinburgh Castle であろう。岩山に聳える雄姿も歴史的価値も絶大である。他にも推奨するのであれば、ウェールズ北部の世界遺産を構成するイングランドのエドワード1世がウェールズ支配のために建てた諸城（Beaumaris; Caernarfon; Conwy; Harlech）だろう。

#### <宮殿>

参加学生間での知名度からすると Buckingham Palace なのだろうが、Windsor Castle も外観・内部ともにそれ以上かもしれないし、小規模だが衛兵交代もある。

#### <大聖堂>

ロンドンで1か所となると、王室ゆかりの Westminster Abbey を選ぶ参加学生が多いが、教区教会ながらもクリストファー・レン（Christopher Wren）によるバロック式の St Paul's Cathedral はそれと双璧を成す。地方では York Minster や Durham Cathedral もそれらに匹敵。塔の高さやマグ

ナ・カルタの所蔵等で Salisbury Cathedral を選ぶ参加学生も時にいる。

#### <教会>

いわゆる church だが、現存建築の古さとなると大聖堂よりも小さな教会の方が古い場合が多い。ケルト教会の布教拠点 Iona Abbey は遠すぎ、リンディスファーン福音書で有名な Holy Island は干満に合わせた夏季路線バスの変則ダイヤで、素晴らしい訪問先だが難易度が高い。

#### <学校>

創立の古い大学は、王侯貴族が壮麗な建物を建てたため、重厚な造りのものが多い。オックスフォードとケンブリッジ両大学等には学期外に内部が見学可のカレッジや博物館が多い。その他パブリック・スクールの中でも Winchester College や Eaton College 等は見学可能である。

#### <歴史的建築>

領主の館的な巨大な屋敷を見学するなら、ロンドンからは距離があるが Chatsworth House が庭園の造りもあわせて広大で学ぶところが多い。ロンドン近郊であれば、小型ながら Knebworth House でもよい。

時代を表す建築であれば、チューダー様式（例えば Southampton の Tudor House）のもの、ヨークのギルドの貿易拠点 Merchant Adventurers' Hall、ロンドン大火を免れ現役で市最古の教会 St Bartholomew the Great 等がある。

独特なものを追うならば、ロンドンの開閉式の橋の Tower Bridge、聖墳墓教会を模し珍しい円形の Temple Church に注目したい。

### 8. 遺跡・遺構・史跡

世界遺産 Heart of Neolithic Orkney に属する新石器時代の遺跡（Maes Howe; Skara Brae; Ring of Brodgar; Standing Stones of Stenness）はどれも興味深いが、残念ながら本研修では島嶼部への旅行を認めていない。それは天候により帰還が遅れて本体の研修に支障が生じる可能性があるからである。それ以外となると、産業革命を支えた鉱山遺構が興味深い。中でもウェールズの Big Pit National Coal Museum は世界遺産の Blaenavon Industrial Landscape の一部で、実際に鉱夫用のリフトで地下へ降りて大規模な坑道を見学できる。また世界遺産 Cornwall and West Devon Mining Landscape を構成する鉱山もよい。さらに世界遺産 Fountains Abbey の広大な廃墟は、ヘンリー 8 世による大規模なカトリック修道院の打ち壊し

を想起させ、歴史的価値がある。

## 9. 芸術

### <文学>

英国には児童文学が多数あり、聖地と言える場所を持つものも多い。例えば *Alice in Wonderland* の Oxford、*Winnie the Pooh* の Pooh Country、*Paddington Bear* の Paddington Station、*Peter Rabbit* の Hill Top、*Robin Hood* の Sherwood Forest、*Harry Potter* の各ロケ地等がある。その他シェークスピアなら Stratford-upon-Avon、ワーズワースなら Lake District、ブロンテ姉妹なら Haworth、アガサ・クリスティなら Greenway となる。

### <音楽>

クラシックなら Royal Albert Hall、ビートルズならロンドンの Abbey Road やリヴァプールの Beatles' Story と Beatles Museum であろう。また Holst の博物館 Holst Victorian House がチェルトナムにある。

### <演劇・ミュージカル>

演劇と言えばシェークスピアで、ロンドンならば Globe Theatre での観劇が当時を思い起こさせ、Stratford-upon-Avon ならば Royal Shakespeare Theatre となる（他にも Shakespeare's Birthplace 等が学びになる）。

West End でのミュージカルはニューヨークの Broadway 同様に盛んだが、His Majesty's Theatre の Phantom of the Opera と Sondheim Theatre の Les Misérables が、同じ劇場で同じ演目が続けていて双壁であろう。

## 10. 製造・マーケット

製造所での見学ということになると、蒸留所、醸造所、窯業、製粉、チーズ、キルト、自動車、チョコレート、鉛筆、樽といった業種が目立つ。あえて蒸留所や醸造所を外すと、窯業ではストーク・オン・トレントの World of Wedgwood、製粉ではウィンチェスターの City Mill 等が推奨できる。

マーケットは、ロンドンでは多数あるのだが、有名なところでは Covent Garden、庶民的なところであれば Campden Lock Market、また食材の学びとして Borough Market を推奨する。地方ではカーディフに複数発達したマーケット、ストールの並びが美しいノリッジのマーケットが推奨される。

## 11. 自然景観・庭園

自然景観でまず注目したいのは地層である。まずチョーク質の断崖がある White Cliff (ドーヴァー)、Seven Sisters、Beachy Head 等が見所となる。また世界遺産 Dorset and East Devon Coast を構成するジュラシック・コーストの断崖は場所によって色が異なり、地質学的に興味深く、化石でも有名な地域である。山ではウェールズの Mt Snowdon の他、スコットランドにある英国最高峰の Ben Nevis や The Isle of Skye の Cuillin Hills 等も見所だが、スカイ島は本研修の自由旅行では無理だろう（橋で本土とつながっていて訪問禁止ではないが、運転を許可していないので車が使えず、往復に時間がかかり過ぎて現実的ではない）。湖ではやはり Lake District と Loch Ness であろう。

この他動物も自然と考えれば、Scotland の North Berwick 沖合にあるカツオドリ (gannets) の群生地である Bass Rock が素晴らしい（シェトランド諸島の The Isle of Noss も海鳥の群生が抜群に凄いが、短期間の自由旅行では無理）。

庭園については、まさに英国の真骨頂で、細かいところにも目を向ければきりが無い。世界遺産になっているロンドン郊外の植物園 Royal Botanic Gardens, Kew や Cornwall の Eden Project の他、王立園芸教会直営の5庭園（1つに絞るならロンドンに近い RHS Garden Wisley がよいであろう）はどれも英国の園芸文化を学ぶのに最適である。

## 12. 交通機関

日本であまり見ることのない交通機関の見学がまず意義深い。起伏が少ない土地であればこそ発達した運河に合わせて幅を狭くした narrow boat (例えばロンドンの Little Venice が基地：操縦は講習を受ければ免許が不要)、ロンドンの郊外型の新交通システムの DLR (Dockland Light Railway) に注目したい（地下鉄よりも建設コストが低い）。

保存鉄道は、旧営業路線を引き継いだ民間ボランティアが運営し、鉄道を文化遺産として動態保存して乗客を有償運送するもので、鉄道を文化遺産として捉え、特に鉄道ファンでもない方々も含めて活動に当たる民度の高さと路線の数の多さは印象的である。それは産業革命をリードし、製鉄と蒸気機関を開発した英国が蒸気機関車を作った誇りに由来するものではないかと思われ、ぜひともその実態を経験して欲しい。

まずはロンドンにあって比較的訪問しやすいものを推奨するならば、標準軌（軌間1435mm）の場合は Epping Ongar Railway で、SL で運行する便もあり、アクセスに地下鉄駅からロンドンのバスの歴史的な二階建て車両も経験できる。

また英国にはナローゲージ（ウェールズにも集中している）の保存鉄道も多数あり<sup>9</sup>、ロンドンから遠くない範囲で1路線ということであれば、イングランド南岸にある軌間381mmの Romney, Hythe and Dymchurch Railway<sup>10</sup>、もしくはロンドンから北方の軌間610mmの Leighton Buzzard Light Railway<sup>11</sup>（元採砂運搬用）を推奨する。この他保存鉄道ではないのだが、地元のグループ等が運行する公園等のミニチュア鉄道類も日本にはない文化で、大人の乗客も多い。ロンドンに近いところを1か所というのであれば、軌間305mmでロンドンの大公園に行く Ruislip Lido Railway を推奨する<sup>12</sup>。

### 13. 娯楽施設

娯楽施設というと単なる遊びのように聞こえるが、将来ビジネスでの活躍を志す場合や、体験できることに自身の専攻分野と関係がある場合等は、短期研修に組み合わせて訪問する価値がある。動物園、植物園、水族館、遊園地、展望台、歴史村の類等がこの範疇に属する。これらを見ると、大都市の一人勝ちの様相を見せる日本とは異なり、比較的平らな土地が多い英国では、集落がまんべんなく分散していて、小規模

- 
- 9 英国ではナローゲージと言えば標準軌（1435mm）未満の軌間の鉄道を指すのが普通であるが、日本ではJR在来線や多くの私鉄が狭軌（1067mm）であるためか（新幹線やかなりの私鉄は標準軌）、狭軌未満のものをナローゲージと呼んでいるようである。因みに、英国には日本で言うケーブルカー（英国では通例 funicular で、cable car はロープウェーのこと）の中に、標準軌を超える軌間を持つものがある。
  - 10 路線長が21.7kmにも及ぶ長大路線を誇り、SLも標準軌用の機関車をそのままスケールダウンしたような本格的なもので、常に乗客も多く、成功している保存活動のモデルと言える存在である。
  - 11 路線長は4.1kmで、途中スタッフが降車して踏切部分で自動車を旗の合図で止めて運行する箇所が複数ある。路線途中で機関庫や展示の見学ができ、かつて産業を支えた頃のことを学べる。
  - 12 英国ではminiature railwayと言うと実際に乗車できるものを指すことが多い。これに対し庭園や室内に線路が敷設された模型鉄道の場合はmodel railwayと称する。

なものも地方にも多数あり、人々が超大型の施設の刺激ばかりを追求するわけではなく、中小の施設でのんびりと楽しむことができているように見える英国はある意味羨ましい面がある。

参加学生がこれまで訪問したものを挙げると、やはり大都市の大型施設である大観覧車の London Eye、スタジオ見学の The Making of Harry Potter 等が多い。そこで大型レジャー施設でも学びの深い訪問先として推奨したいのは、日本で言う歴史村にあたる Blith Hill Victorian Town (世界遺産の Ironbridge Gorge 内) と Beamish Museum である。前者は世界遺産の Ironbridge Gorge 内にあり、ヴィクトリア朝時代の商店や産業を再現している野外博物館である。後者は、路面電車とクラシックバスの動態保存と昔の街並みを時代別に再現した野外博物館である。この他に Birmingham 近郊の Black Country Living Museum も、街並みと炭鉱見学を組み合わせた学びの施設として価値がある。

#### 14. 終わりに

本稿では、英国での短期研修参加者を念頭に、オフの日の自由旅行の学びを重視した訪問先の選択材料と準備方法を示す鈴木 (2026 予定) の内容や構成の狙いについて解説した。また本稿はその著作の「選択材料」部分のダイジェストとしても読むことができるように工夫した。将来の本研修や類似の研修の参加者にとって役立つ資料となっていることを願うのみである。

#### 参考文献

- 教育未来創造会議 (2023.4.27) 「未来を創造する若者の留学促進イニシアティブ (第二次提言) [https://www.mext.go.jp/content/20230608-mxt\\_oseisk02-000030032\\_9.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20230608-mxt_oseisk02-000030032_9.pdf)
- 鈴木右文 (2013) 『ケンブリッジ大学英語・学術研修への招待：名門校で学ぶ、暮らす、国際人になる』九州大学出版会。
- 鈴木右文 (2019) 「海外短期プログラムの渡航手続きをめぐって－国籍で異なる査証取得と旅券紛失の対策はどこまで－」『英語英文学論叢』第69集、37-52頁。
- 鈴木右文 (2020) 「車椅子対応による短期海外プログラムの進化」『英語英文学論叢』第70集、13-32頁。
- 鈴木右文 (2024) 「短期海外研修プログラムにおける安全の強化－感染対応と自由旅行対応－」『英語英文学論叢』第74集、37-57頁。
- 鈴木右文 (2026 予定) 『(仮題) 英国旅の目的地1000！－選定と準備－』彩流社。
- 鈴木右文・廣田稔 (2025) 『英国学術渡航学生の準備作業：ケンブリッジ大学英語・学

術研修事前研修ガイド—類似研修の参考にも—』九州大学大学院言語文化研究院言語文化叢書25.

日本学生支援機構 (2025.4) 「2023年度日本人学生留学状況調査結果」 [https://www.study-injapan.go.jp/ja/\\_mt/2025/04/data2023n.pdf](https://www.study-injapan.go.jp/ja/_mt/2025/04/data2023n.pdf)

## **Assisting Members of a Short-Term Study Program in the UK with their Selection of Optional Travel Destinations**

Yubun SUZUKI

The recent governmental numerical targets of the increase in Japanese students studying abroad have exerted serious leverage on Japanese institutions for higher education. This new landscape of the Japanese educational sector has embroiled the author in the trend of strengthening short-term study-abroad programs. In fact, he has been making constant efforts to enhance the quality of his summer program at the University of Cambridge for the purpose of appealing to more students to file an application to the program. As part of this endeavor, he will soon publish a book on how participants in a short-term program in the UK are expected to make a practical and academic choice of the destinations of their optional free-day travels during their stay in a way that will meaningfully supplement the main weekday part of the short-term academic program.

The present paper summarizes the contents of the book, mainly trying to explain their aims for the good reason that the author has dispensed with such explanations in the manuscript of the book, taking space, cost and nature of it into consideration. The paper recommends not only places of the participants' own interest, but also some selected World Heritage sites, castles and palaces, cathedrals and chapels, ruins and historic sites, museums and art galleries, gardens, geographical features, schools and architecture, markets, transportation, preserved railways, factories, and amusements, with a fair emphasis on their academic aspects and in a radically abridged manner.

He earnestly hopes that this writing will be useful for the participants and the staff members of his own program and other similar short-term programs to be held in the UK.